源氏物語第一部における一手法

――関係総括の「さすがなる」――

田中政幸

一

現在のところ一般に『源氏物語』は三部構成（「桐壺」～「藤裏葉」を第一部、「若菜上」～「幻」を第二部、「匂宮」～「夢浮橋」を第三部とする）[1]をもつものとみなされている。そして、第一部は短編の物語が積み重ねられていて、短編小説集的な観があり、それが第二部・第三部になると中・長編化の道を辿るというのが大方の見方であるようだ。本稿はそのうちの第一部において、紫式部独自の手法と考えられる表現についていささかの私見を述べてみようとするものである。

二

『源氏物語』第一部・第二部、即ち、光源氏の一生を貫き通すものとして、光源氏の藤壺宮への思慕があり、それが物語を展開する原動力となっているといわれている。[2]光源氏の藤壺宮に対する思慕の情は、首巻「桐壺」後半部から書きおこされるが、そこでは記述の量も少なく、また光源氏の年齢も元服前後とあって、萌芽的なものであった。したがって、いわゆる藤壺宮物語の本格的な始まりは、例の「若紫」において重々しく語り出される光源氏と藤壺宮との逢瀬の場面ということになろう。

さて、その「若紫」における藤壺宮物語を見てみると、日本古典全書本で四ページ足らずという短いものである。「藤壺の宮、なやみ給ふ事ありて、罷で給へり。」という一文から書き出され、逢瀬の場面が描かれ、ついで宮の懐妊の事とそれに対するそれぞれの人々の反応が書かれる。そして、藤壺宮は宮中に帰参する。

①七月になりてぞ参り給ひける。めづらしうあはれにて、いとどしき御思のほど限なし。すこしふくらかになり給ひて、うちなやみ面痩せ給へる、はた、げに似るものなくめでたし。例の明暮こなたにのみおはしまして、御遊もやうやうをかしき頃なれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつつ、御琴笛など、さまざまに仕うまつらせ給ふ。いみじうつつみ給へど、忍び難き気色の漏り出づる折々、宮もさすがなる事どもを、多く思し続けけり。（若紫㈠　三一五④～⑩）[3]

右に引用した部分を以て「若紫」における藤壺宮物語が終結する。ここで私が注目したいのは最末尾の「宮もさすがなる事どもを、多く思し続けけり。」という一文である。ここまで藤壺宮の光源氏に対する心情については多くは書かれていない。注意すべきものとしては、逢瀬の場面での、

宮もあさましかりしを思し出づるだに、世とともの御物思なるを、さてだにやみなむ、と深う思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとて

うちとけず、心深うはづかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、（若紫㈠三一二⑬～三一三②）

という箇所と、その直後の「世がたりに」で始まる和歌とがある。しかしながら、私はそれら以上に先にあげた一文に重みを感ずるのである。まず、その位置が「若紫」における藤壺宮物語の最末尾であって、一つの物語にしめくくりをつけている文であること。そしてその内容はというと、帰参後ますます帝の寵愛を一身に受けている藤壺宮、その面前でくり返し催される管絃の遊宴に、同じく帝の寵愛厚い光源氏が召し出され琴笛などを演奏する。そんな折、光源氏はひたかくしにしている藤壺宮恋慕の情がどうしようもなく「漏り出づる」ことになる。それと気づくのは宮をおいて他にはいない。「桐壺」巻末の「御遊びの折々、琴笛の音に聞え通ひ、ほのかなる御声をなぐさめにて」という箇所と響き合う表現となっている。[4]「宮もさすがなる事どもを、多く思し続けけり。」、これは「桐壺」中の相当箇所も含めたここまでの藤壺宮の光源氏に対する心情を総括したものと考えられるのである。また、それはここまでの二人の関係を宮の側から総括したものとも言いかえることができよう。「さすがなる事ども」とあるように、宮の胸中には種々複雑な思いがわきおこっているのであろう。その中には表向きはつれなく冷静な態度であるものの、光源氏にひかれる気持もあると私は見たい。一体こうした二人の関係はこの先どうなるのであろうかという思いを読者に残しつつ、再び作者の筆は若き紫上の事に戻る。

三

さて、今述べてきたように「若紫」の「さすがなる」の用例は、藤壺宮・光源氏の関係を総括する働きを担っているものと見ることができた。次には他の「さすがなる」の用例を見ることにしよう。

残りの用例は、「花散里」一例・「螢」二例・「真木柱」一例・「藤裏葉」二例の計六例である。「若紫」の一例をあわせて全七例が『源氏物語』の「さすがなる」の数である。では「花散里」の例から順次見ていくことする。

②人知れぬ御心づからの物思はしさは、いつとなきことなめれど、かく大方の世につけてさへ、わづらはしう思し乱るる事のみまされば、もの心細く、世の中なべていとはしう思しならるるに、さすがなる事多かり。（花散里㈡一一五①～④）

これは「花散里」の巻頭部分である。直前の「賢木」において、最大の庇護者桐壺院が崩御し、また、藤壺宮も入道してしまうという大きな打撃を光源氏は受ける。世は光源氏を敵視する弘徽殿大后・右大臣方に移っている。さらに悪い事に朧月夜尚侍との関係が露顕してしまい、大后に光源氏追放の決意を固めさせてしまっているのである。累は東宮（後の冷泉院）にまで及ぶ可能性が十分にある。以上のような桐壺院崩御後の光源氏の身辺はいわば累卵の危機にあるといえる。そうした身の情況が光源氏をして「世の中なべていとはしう」と思わせることになり、世を捨てようとする気持も自然と強まってくる。しかし、自分と深い関係にある女性達の事を思うと、世を捨て去ることもできかねる、という心境を述べたのが先に引用した部分である。

ところで、「さすがなる事多かり」とあるように「さすがなる事」は多くあるのだ。気にかかる女性達は多い。「さすがなる事」は光源氏のここまでの女性関係をまとめて表現したものと考えること

ができる。つまり、総括しているわけである。そして、これから物語る花散里という女性もその中の一人なのである。この巻の「さすがなる」の用例が巻頭にある意味を私はそのように考える。新たな物語（花散里物語）を始めるときの一つの手法と見ることができよう。

③昨夜いと女親だちて、繕ひ給ひし御けはひを、うちうちは知らで、あはれにかたじけなしと皆いふ。

姫君は、かくさすがなる御気色を、わがみづからの憂さぞかし、親などに知られ奉り、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし、人に似ぬ有様こそ、つひに世語にやならむ、と、起き臥し思しなやむ。（螢㈢一七五⑨～⑭）

④さるは、まことにゆかしげなき様には、もてなしはてじ、と、大臣は思しけり。なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくやは思ひ聞え給へる。ことに触れつつ、ただならず聞え動かしなどし給へど、やむごとなき方のおよびなさにわづらはしくて、おり立ちあらはし聞え寄り給はぬを、この君は、人の御さまも、気近く今めきたるに、自ら思ひ忍び難きに、折々人見奉りつけば、疑おひぬべき御もてなしなどは、うち交るわざなれど、あり難く思し返しつつ、さすがなる御中なりけり。（螢㈢一七五⑮～一七六⑥）

右に引用した箇所は、例の、[6]光源氏が螢の光で玉鬘を照らして、螢兵部卿宮に玉鬘の姿を見せて惑わそうとする場面に続く箇所である。螢の光の場面は、玉鬘をめぐる求婚譚のハイライトである。この場面の直後に③と④とがある意味は何であろうか。数ある求婚者の中で螢兵部卿宮にだけほのかではあるが、玉鬘の姿を見せた光源氏の意図は、宮になら玉鬘を許してもよいという気持があったからであろう。玉鬘の方でも光源氏の求愛行為から逃れたいがために宮に心動かす気持もあると書かれてあった。

正身は、かくうたてあるもの歎しさの後は、この宮などはあはれげに聞え給ふ時は、すこし見入れ給ふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、かく心憂き御気色見ぬわざもがな、と、さすがにざれたる所つきて思しけり。（螢㈢一七二②～⑤）

そうした時に、螢の光の事件が生ずる。これを契機に玉鬘は、自分の置かれている境遇を見つめ直すことになる。それは即ち、自分と光源氏との関係を思いやることである。「さすがなる御気色」、これは光源氏の玉鬘に対する態度を総括している表現である。玉鬘に懸想しながら、それを他人に知られないために、表面は親のようにふるまう「御気色」である。一方の玉鬘はというと、傍線部から知られるとおり、現在の父娘という関係（世間にはそういうふれこみで玉鬘は光源氏の許に引き取られている）でなくて光源氏の愛情を受けるのであったならばよかったであろうに、という思いが胸中にある。真近に光源氏に接することが多くなるにつれて、玉鬘も光源氏の魅力にひかれはじめていたのである。③④の文章のすぐ後にも魅力あふれる光源氏の容姿を、「思ふことなくば、をかしかりぬべき御有様かな、と姫君思す。」という一文がある。

さて、③の「さすがなる御気色」は、光源氏の玉鬘に対する態度を総括するものであった。そして、それに対する玉鬘の心情を書いたのが③の文章であった。では、次に④の文章を見てみよう。

光源氏の処遇の仕方に思い悩む玉鬘を描いた作者の筆は、今度は

光源氏に移る。光源氏が玉鬘に「さすがなる御気色」を示すのはなぜか。「まことにゆかしげなき様には、もてなしはてじ」とは思っている。しかし、「さる御心癖」という美しい女性は放っておけない性癖があり、自分が後見役となっている秋好中宮に対してさえも、折にふれて懸想めいた言動を示すが、相手が中宮という身分であるから抑制しなくてはならない。それと比較すると玉鬘は「人の御さまも、気近く今めきたる」という近付きやすい人柄であるという。しかし、人柄のためだけでは勿論ない。女は自分の手許にあるのだ。いわば生かすも殺すも自分次第というところである。自分の女にしようと、他の男と結婚させようと、自分の意志次第なのである。だから、「あり難く思し返しつつ」という光源氏の自制心だけで保たれている二人の関係なのである。「さすがなる御中」とは、光源氏の側ではその自制心が時々はなくなりそうになり、玉鬘の側では求愛を疎ましがるというものの、光源氏の魅力に負けてしまいそうだ、というあぶなっかしい二人の関係だと解したい。つまり、ここまでの二人の関係を総括している表現なのである。

⑤頭の中将も、この尚侍の君をいとなつかしき兄弟にて、睦び聞え給ふものから、さすがなる気色うちまぜつつ、宮仕にかひありてものし給はましものを、と、この若君のうつくしきにつけても、「今まで皇子たちのおはせぬ御歎を見たてまつるに、いかに面目あらまし」と、あまりごとをぞ思ひてのたまふ。（真木柱㈢三一四⑦～⑪）

この文章は、「真木柱」の巻末近くにある。「真木柱」は、いわゆる「玉鬘十帖」の最終巻である。冒頭に玉鬘が意外にも髭黒大将の手に落ちた事が書かれ、玉鬘求婚譚に結着がつく。それによって生じた波紋が種々描かれるが今は措く。柏木（頭の中将）も玉鬘（尚侍の君）の求婚者の一人であったが、異腹ながら姉妹と知ってあきらめている。しかし、それまでの名残で時々は懸想人めいた言動をするというのである。この「さすがなる気色」も柏木と玉鬘との関係を総括しているものとみることができる。求婚譚に結着がつき、求婚者の一人であった柏木が、玉鬘の結婚後どうなったかということを、つまり、柏木と玉鬘との関係に結着をつけているのである。

⑥御いそぎの程にも、宰相の中将はながめがちにて、ほれぼれしき心地するを、かつはあやしく、わが心ながら執念きぞかし、あながちにかう思ふことならば、関守の、うちも寝ぬべき気色に思ひ弱り給ふなるを聞きながら、同じくは人わろからぬさまに見はてむ、と念ずるも、苦しう思ひ乱れ給ふ。女君も、大臣のかすめ給ひし事の筋を、もしさもあらば、何の名残かは、と歎しうて、あやしく背き背きに、さすがなる御諸恋なり。（藤裏葉㈢三三七①～⑦）

第一部の最終巻「藤裏葉」の巻頭である。「少女」の巻で語り始められた夕霧と雲井雁との幼い恋もいよいよ大詰を迎えようとしている。「さすがなる御諸恋」は、それまでの二人の関係を総括した表現である。夕霧の内大臣（雲井雁の父）に対する意地、あるいは、夕霧の側に縁談話が持ち上ったり等して、二人の仲は妙な具合になって、そっぽを向き合っているけれど、相思相愛の関係なのである。そして、この巻でようやく二人は結ばれることになる。巻の冒頭でそれまでの関係を総括し、その関係が以後どうなるのかを以下に語るという仕組と考えられる。これは先に見てきた例②にも通

ずる所があるようだ。

⑦またいと気高うさかりなる御気色を、かたみにめでたしと見て、そこらの御中にもすぐれたる御志にて、並なきさまに定り給ひけるも、いと道理と思ひ知らるるに、かうまで立ち並び聞ゆる契、疎なりやは、と思ふものから、出で給ふ儀式の、いとことに装ほしく、御輦車などゆるされ給ひて、女御の御有様に異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。（藤裏葉㈢三五二⑥～⑪）

紫上と明石上との初対面を描いた文章の後半部である。「さすがなる身の程」とは、明石上が自分と紫上とを引き比べて、やはり自分と紫上とは段違いの身の程であると思い知らされる、ということを表現したものである。「藤裏葉」の巻は周知のとおり第一部の最終巻であり、光源氏とその周辺の人々は万事めでたい結末を迎える。この巻自体がこれまでの巻々の総括となっている。明石上もようやく娘の明石姫君が入内することになり、付き添い役として一緒に暮らせるようになる。自分も紫上と立ち並ぶ幸運を得たと思う。しかし、対面の後、紫上が宮中から退出する儀式が女御の退出儀式と同等にされるのを目のあたりに見て、彼我の身分の違いを改めて思い知る。つまり、紫上との比較を通して、結局は、自分と光源氏との関係がいかなるものであるかを再認識することになる。自分と光源氏との関係を総括しているわけである。

四

以上に見てきたとおり、「さすがなる」の用例はすべて第一部にあり、光源氏と藤壺宮・花散里・玉鬘・明石上、柏木と玉鬘、夕霧と雲井雁、という男と女との関係を総括している表現とみることができた。ここでさらに注目すべきことは、全七例がいずれも地の文であることだ。これは、語り手がそこまでに語ってきた男女の関係を、語り手の立場から総括するという姿勢を窺わせるものである。それが顕著に表われているのは、①「さすがなる事どもを、多く思し続けけり。」②「さすがなる事多かり。」④「さすがなる御中なりけり。」⑥「さすがなる御諸恋なり。」⑦「さすがなる身の程なり。」という諸例である。いずれも語り手の判断を如実に示す言い切りの形を持つものである。こうしことから「さすがなる」という表現は、作者が或る一つの話（男と女との関係）に締め括りをつけたり、或は、新たに物語を展開させるにあたって、それまでの両者の関係を総括しておくという、即ち、構想の切れ目の所に用いる意識的な手法と考えられるのである。また、使われるのが第一部に限られていることから、第一部における短編積み重ね形式の手法の一つとも考えられるのである。

このように見てくると、『源氏物語』の作者は「さすがなる」という語を自覚的に独自に使用したという結論に達せざるを得ない。このことを検証するために他の物語作品の用例を次に見ていくことにする。

五

まずは、『源氏物語』の影響を強く受けているといわれる平安後期物語を代表する『夜の寝覚』(6)『浜松中納言物語』(7)『狭衣物語』(8)に

ついて見てみよう。

用例があるのは、『浜松中納言物語』と『狭衣物語』とで、『夜の寝覚』にはない。『浜松』には四例、『狭衣』には三例が見られるが、『浜松』の用例から見ていくことにする。

ⓐ女王の君思ひつゞくるに、「后そく山を出でたまひしより、この若君をあづかりて、……親子のちぎり、この世の事にもあらざんなるを、かゝる事なども知らせで止み給なんが、罪ふかくあはれにもありぬべきかな」と、「帰るべし」と聞くにつけても、覚えければ、物めでをし、あはれを知る方も心よはう、さすがなる世にやありけん、日本ならば、さばかりにては、知らせでも止みなましを、さかしきところある世の人にて、ふかき物かくしとほしき事などはなき世なるべし、（巻の一202⑤～⑮）

この例は、語り手が日本と唐とを比較して、「唐土は物事を深く愛賞し、しんみりした情趣を理解する方面につけても情にもろく、（恐ろしいなどと聞くが）とはいえ案外率直な国であったのだろうか。」[9]と、女王の君が中納言に、一夜の契りを結んだ相手が実は唐后であり、しかも若君までが生まれたことを打明ける理由を推測して述べている所である。「さすがなる世」として、唐土の人の性情を一般的にいっている。

ⓑ「今はたゞこの御をもむきのまゝに、おはせんぞよからん。さすがに心をたてゝ、おはしますまじきやうにさへ、人に見え知られ給にしはと、くちおしき事なり。いみじき思やり、心深きながら、たゞせう〳〵の世のもどきそしられいたうたどらず、あるに任せて、おいらかに人のもてなすまゝに、いとふかゝらざらんは、罪も消えて、こゝしうらうたかるべきわざなり。さすがなるさかしら心の、際高くさいまくれたるやうなる、返てはうたてありや」（巻の二220⑭～221③）

唐から帰国した中納言を迎えるにあたって、中納言邸に引き取られていた尼姫君（中納言の渡唐中に出家）が他所へ移る意志を父の大将と義母（中納言の母）とに伝える。それに対する大将の諫めのことばである。「さすがなるさかしら心（思慮深いといっても、一面しっかりしすぎた心）[10]」は、傍線部と呼応して、尼姫君が中納言の帰国を待たずに出家してしまったことに対する父大将の、多分に口惜しさの混じった非難がましい、娘の真の気持を理解できないことばとなっている。

ⓒ「ながらへわびて、後の世をだにと思とり、……雪の中にのみうづもれ侍りつゝ、おひたち侍人の宿世つたなく、又かゝる身には、げにかゝる山の鳥などのおなじことゝ思侍れば、何かいとおしかるべきに侍らねど、世に侍らん事のこりなふおぼえ侍を、命はかぎり侍ことなれば、立ちをくれ過し侍らん事の、のこり多かるありさまは、いと世に類なふ思やられ侍りて、さすがなるを、いかでかくだにつゆも心をわけで、ひたぶるに願ふ道の光をも思はんと念じ思給ふるに、……」（巻の三320⑦～321⑩）

吉野尼君が再度訪れた中納言に、「この度はかたみにこよなふ面なれ給へる心ちして、心の隔てなく、昔よりのことゞも、かき崩し」話す会話文中に使われている。この「さすがなる」は、吉野尼君が娘の吉野姫の行末を気がかりに思う親心を表現している。奥深い山で浮世離れした生活をしている現在の娘の身を、「何かいとお

しかるべきに侍らねど」と一応は仕方のない運命と思い切ろうとする。しかし、自分の死後の娘の身を思いやると、そうはいってもやはりふびんでならない、という親としては自然な情愛を吐露している。

ⓓ「よにおはせぬやうあらじ。……なをむかへとりて、いかなるさまなりとも、われおもひあつかひてこそ、なを朝夕おぼつかなからず見るに、心も慰さまめ」と思ひつゞくるに慰さむを、「われはかく思ふとも、さすがなる心の鬼そひ、まことのけぢかき契りのかたに心よりはてゝ、「あらぬそゞろなる人ぞ」など教へ立てられんこそ、いみじくくちおしう心うかるべけれ。……」（巻の五412⑮～413⑧）

吉野姫を何者かに連れ去られ、何の手がかりも見出せないでいる中納言が、吉野姫の心中をあれこれと想像する所である。姫を都へ迎えたというものの、中納言は吉野の聖の予言（姫は二十歳以内に男女の情を知ると不幸になるというもの）に従って「まことのけぢかき契り」を結んでいなかった。それで、姫を盗んだ男によってその契りを体験させられたはずの姫の心に、中納言を疎んじ、その男に愛着を感ずる気持が生じているのではないかと、姫の心を信じながらも疑心暗鬼に陥っている中納言である。「さすがなる心の鬼そひ」は、「（移り気な心をもつ姫ではない）とはいうものの、移り気めいた邪心が加わって。」と解釈されている。[11] また、「心の鬼」については、補注に、

「心の鬼」は源氏物語の用例ではすべて「良心の呵責」の意のようであるが、ここでは、通常の心のほかに、うらに隠れている、人間のもう一つのよからぬ心を意味するのであろう。[12]

と説明されている。従って、「さすがなる心の鬼」とは、吉野姫に固有な心の動きではなく、人間一般に通ずる心の動きを表現しているものと見ることができよう。

さて、以上見てきたように、『浜松』の四例は、ⓐが地の文であるほかは、ⓑⓒが会話文、ⓓが心中語であり、また、各例の所在もそれぞれ巻の一・二・三・五というように全体に散らばっている。そして、各例の内容は、ⓐが唐国の人間の一般的性情を、ⓑが一般的に持たないほうがよいとされる心づかいを、ⓒが親として自然な情愛を、ⓓが人間一般に通ずる心の動きを表現している。いわば、人間（ⓐの場合は「社会」ということになろうか）一般に共通する性情を述べるという使い方になっており、『源氏物語』の男女の関係を総括するという使い方とは相違しているのである。

六

次に『狭衣物語』であるが、この作品の本文は周知のように諸本間の異同がはなはだしく、いま通行の日本古典全書本・日本古典文学大系本で見ても、両本いずれも三例ずつ「さすがなる」の用例を持つけれど、三例中二例は同じ位置にあるが一例は別々の位置にある。

(全書本)	(大系本)
(イ) 女君にも、「老人の憎むなるべしな。ことわりなりや。たのもしげなりし法の師	女君にも、「おい人の、にくむな。ことはりなりや、頼もしげなりし法の師に引き離れ

を引きたがへて、かく物はかなき身の程なれば。おとなしの里尋ね出でたらば、いざ給へよ、煩はしき人のさすがあれば、しばし人に知らせじと思ふ程に、かくおぼつかなくあだなるものに思したるもことわりなり。……」（巻一（下）・上252③～⑩[53]）

主人公の狭衣が飛鳥井君（女君）に自分の身分を明かさない言い訳をする会話文である。自分には正妻がいるから、それに憚られてしばらくは内密にしたいと言うのである。

て、かく物はかなき身の程なれば。音無の里尋ね出でたらば、いざ給へ。煩はしき人の、さすがなるぞ。されば、「暫し、人に知られじ」と、思ふほどに、かくおぼつかなくあだなるものに、思ひ給へるも、ことはりなりや。…」（巻一91⑤～⑩[54]）

(ロ) 京には大管会など近うなりぬれば、源氏宮は女御代し給ひて、やがて参り給ふべしとあるを、今始めて聞ゆる事にはあらねど、大将の御心の中思ひ遣るべし。「今は斯うにこそは」と数へられて、我が身も憂き世を思ひ離れぬる日数も残りなきやうに思さるるには、さすがなる事多くて、（巻二（下）・上358⑪～⑭）

京には、大管会など近くなりにければ、「源氏の宮、女御代し給て、やがて参り給べしとある」と聞き給て、大将の心の中は、いかばかりあらん。今始めて聞ゆる事にはあらねど、「さらば、かうにこそは」と、思ふに、胸の所もなくなりまさり給て、我身も世にあるべき日数、かぞへ立てられて、憂き世離るべき門出し給ひけり。（巻二190⑫～⑯）

幼い時から兄妹として育った源氏宮に対する狭衣の秘めたる恋情は募るばかりである。そこへ源氏宮入内の噂が聞こえてくる。叶えられない恋に決着をつけるために狭衣は出家を決意するという所である。この部分、大系本には「さすがなる事多くて」に相当する表現がない。主人公が出家を決意するにあたって「さすがなる事」が多いという表現をするのは、『源氏物語』の「花散里」の例であった。

(ハ) かやうなる夜の紛れどもさへ過ぎぬれば、忍びて竹生島に参り給はむ事を人知れず思し設くるにも、…さすがなる忍ぶ草ぞ、中々尋ね寄り給ひてしも、宮思し隔てたる様に見奉り給へば、いとど「跡絶えなむ後は、いかなる様にてか」など心苦しきを、思し余りて、（巻三（下）・下138④～⑨）

かやうの事どもも過ぎて、春の光待つ程は、異なる紛れなかりければ、忍びて、竹生島にまいり給はんことを、思し設け給に、……さすがなる忍ぶ草ぞ、中〳〵、訪ひ寄り給て、宮にも、かれを、「憎し」とはなけれども、こよなう思し放ちたるさまに、見え給へば、いとゞ、「跡絶えなん後は、いかなるさまにか」と、心苦しきを、思し余りて、（巻三329⑭～330③）

源氏宮は賀茂の神託により斎院に卜定されて、入内の件はとりやめとなった。しかし、源氏宮が自分の手の届かない所へ行ってしまったことに変わりはない。それから約二年後、出家の志を果たすために竹生島（飛鳥井君の兄の僧がいる）へ行くことを決意するが、故飛鳥井君腹の姫君の処遇に思い悩み母宮に打明けるという所であ

る。「さすがなる忍ぶ草」は今出家するにあたって一番気がかりな存在である飛鳥井君腹の姫君を示す表現である。(ロ)の例と違って、これは具体的な表現となっいる。

(ニ)「この、世に言ひ扱ふらむ様に、げにえあるまじき事なれば、いと斯うしも覚ゆるにやあらむ。またえ保つまじかりけるにや」と、「さすがなるをこがましさを顕はし果ててむ事よ」など、方々にさへ安からず、わりなき御心の中、来し方にもいやまさりになりたり。（巻四（下）・下247⑨～⑬）

「この世に言ひ扱ふらんやうに、げに、えあるまじき事なれば、いとかうも思ゆるにやあらん。また、『えたもつまじかりける』と、さすがなるをこがましさを、現し果ててむ事よな」と、方々にさへ安からず、わりなき御心の中、来し方もいや増りになりたり。（巻四427①～⑤）

神託により狭衣即位のことが定められる。その時の狭衣の心中を述べた所である。「さすがなるをこがましさ」の解釈については、全書本と大系本とでは説が分かれている。[19] しかしながら、出家の志が果たせないこと、斎院（源氏宮）と会う機会がなくなること等と相俟って、即位することをためらう理由の一つとなっていることには変わりないであろう。

では、以上の『狭衣』の用例について整理してみよう。(イ)が会話文、(ロ)(ハ)が地の文、(ニ)が心中語というように、『浜松』の四例と同様に地の文以外にも使われている。表現の内容については、『浜松』ほどにも共通項が見出せない。『浜松』と相違する点は、(ロ)の例が『源氏』の「花散里」の例と酷似しており、意識して真似たかと思わせる。しかし、大系本にはそれに相当する箇所がないため、『狭衣』の原本にあったのかどうか不安であるし、他の例も『源氏』での使われ方とは趣を異にしているので、私は偶然の一致とみたい。

さて、平安後期物語を代表する三作品について見てきたわけであるが、『寝覚』には用例がなく、用例のある『浜松』『狭衣』でも、『源氏』の使い方を受け継いだ表現の仕方とは言い難いものばかりであった。『源氏』では、構想の切れ目の所に、地の文として使われて、男女の関係を総括するという、第一部における短編積み重ね形式の手法の一つとして、意識的な使用をしていると考えられた。このことと比較してみると、後期物語は短編積み重ね形式を脱した『源氏』の第二部、第三部を継承した長編物語であることから、『源氏』第一部の手法を必要としなかったといえよう。そのため『源氏』では自覚的に地の文に使用された語が、無自覚的に会話文にも心中語にも使用されるという現象も生じたと思われる。

七

最後に、『源氏物語』に先行する諸作品及び同時代の作品について見ておこう。

一口にいって、『源氏』以前の作品には「さすがなる」の用例はないのである。日記の『土佐日記』『蜻蛉日記』、歌物語の『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』、そして、作り物語の『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』、さらに同時代の『枕草子』『和泉式部日記』及び『紫式部日記』[20]といった各時代の代表的和文作品には、「さすが」「さすがに」等の連体形以外の活用形の用例は見られるのだが、連体形「さすがなる」の用例は見られないのであ

る。[16] 従って、平安朝和文作品の代表的作品の中では、『源氏物語』の例が初見の例であり、しかも独自な用法を持つものということができよう。

ところで、『源氏物語』の作者紫式部は何のヒントもなく「さすがなる」の独自な用法を編み出したのであろうか。実は、紫式部にヒントを与えたと想像される表現が『伊勢物語』第二十五段にあるのである。

むかし、おとこ有（り）けり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞひぢまさりける

色好みなる女、返し、

見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る（日本古典文学大系本）

連用形「さすがなり」の用例であるが、傍線部分が、女の男に対する態度を表現している。「さすがなりける」の解釈については、大系本の頭注にもあるように、二通りの説がある。[18] しかし、どちらの説をとるにしても、「さすがなりける（女）」が、女の男に対する態度を表現していることに変わりはない。そして、この表現は、両者の関係のこれまでの経過を、女の側の男に対する姿勢を述べることによって総括して、読者に提示しているものなのである。従って、この第二十五段の「さすがなりける」は、『源氏物語』の「さすがなる」と同様に、男女の関係総括の役割を担っている表現とみることができよう。『伊勢物語』は先行作品中で最も強い影響を『源氏物語』に与えた作品といわれてきている。[17] 従って、紫式部が『伊勢物語』第二十五段の表現からヒントを得て、それをさらに文芸的効果性を増した表現にまで熟成したとみることは十分に可能性があるのである。

注

(1) 池田亀鑑氏『新講源氏物語』上巻（至文堂　昭和二十六年刊）。
(2) 玉上琢弥氏『物語文学』（塙書房　昭和三十五年刊）、清水好子氏『源氏の女君』増補版（塙書房　昭和四十二年刊）。
(3) 引用本文は日本古典全書本に拠り、巻名。冊数・頁数・行数の順に示す。以下同じである。
(4) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第二巻（角川書店　昭和四十年刊）一〇八頁。
(5) ③と④とは切れておらず連続しているが、便宜上分けただけで他意はない。
(6) 日本古典文学大系本。
(7) 同右。
(8) 日本古典全書本と日本古典文学大系本。
(9) 日本古典文学大系本の頭注二〇（202頁）。
(10) 同右の頭注一一（221頁）。
(11) 同右の頭注一四（413頁）。
(12) 同右の補注八八九（504頁）。
(13) 巻数・冊数・頁数・行数の順に示す。以下同じである。
(14) 巻数・頁数・行数の順に示す。以下同じである。
(15) 全書本の頭注（二四）

なまじ帝位に即いても、まもなく、その任でなかったとなれば、いい物笑ひ、結局見つともない事になるの義。

大系本の頭注一七

帝位につけば、それ相当な（若宮が女二宮と密通して生まれたという事）馬鹿らしさを、世間にすっかり現わしてしまう事であるなあ。

(16)『宇津保物語』は『宇津保物語　本文と索引』本文編（笠間書院　昭和四十八年刊）に拠り、その他は日本古典文学大系本に拠った。

(17)参考までに八代集の用例について触れておくと、和歌、詞書ともに「さすが」「さすがに」の例は若干ずつ見られるが、「さすがなる」の例は見られない。

(18)頭注一五「男に、逢おうともいわず、また逢うまいともいわなかった、思わせぶりなそぶりをする女で、しかもそういいながら情ありげにも見えた人のもとに。一説、逢うまいともいわなかったのに、いざとなると逢おうとしない女。」（傍線引用者）

(19)玉上琢弥・石川徹・秋山虔・片桐洋一等の諸氏にすぐれた御論考があるのは周知のことであろう。

（追記）小稿は昭和五十二年度提出の修士論文の一部をもとに大幅な加筆をしたものである。小稿が成るまで御導きいただいた稲賀敬二先生に、記して御礼申しあげる。

――鈴鹿女子短期大学助手――